

僕は絵画とは、視覚を用いた哲学だと考えています。

画面上に表れるのは描き手である自分の思想そのものです。

僕は自分自身が育ってきた日本に置いてはぐくまれてきた宗教観、死生観を再発見する過程の中で、何が「良い」のか、美しいとはどういうことなのか、その答えが見いだせると信じて描いています。

呼吸を整え、ひとつひとつの想いを絵筆に託し、手を通して画面の上に絵の具を置いてゆくことは、禅に見られる内なる対話そのものです。美しさに気付く心を養うために、自分を観察し、その日の体調を把握し、筆先に全神経を集中させること。また、集中を高めるために日頃から体調管理を怠らないこと。自分自身を感じることで、その運筆の中に心で見つけた美しさを込めてゆきます。

また、画面上に事実を記載するのではなく、最小限で世界を表す、象徴力も日本がはぐくんだ美しさを考える上で欠かせない要素だと思います。世界の全てを事細かに説明するのではなく、その中のほんの些細な一部分を切り取り、全体の余白を多く残すことで、人間が持つ想像力を最大限発揮させ、より大きく豊かな世界へと導くことができるはずです。

そしてもうひとつ大切なものが、あわれの美学。滅びゆくものや死者への共感、弱い者への慈悲の心こそ美しいと感ずることができます。散り際、去り際、今際の際。それぞれ人生や自然の中において際になるその一瞬にどのように身を処すべきか、と言うこともさることながら、その際を思い、いつ訪れるともわからないその瞬間に向けて精進することもまた、美しさではないでしょうか。もし桜が散らなかったら。もし人が、生き物が死ぬことがなかったら。その儂い一瞬こそが美しいのであって、終わり際がなければただ平坦な時間の流れを続けるだけとなってしまいます。

無常観を基にするあわれの美学。やがて去る者を愛おしく思い、その散り際に美しさを見いだす心。また自らもやがて散ることを自覚し、その中で精一杯の努力を続けることではじめて、今「生きる」ことに価値を見だし、ひいては次世代への美しさの引き渡しができるのではないかと考えています。

またそのように一瞬にして消えてしまうもの、儂いものを慈しむ気持ち。道ばたに咲く花にも命があり、やがて散ってしまう運命にあることを愛おしく思い、その一瞬に出会えた、立ち会えたことを感謝しながら日々制作に取り組んでいます。

佐原和人